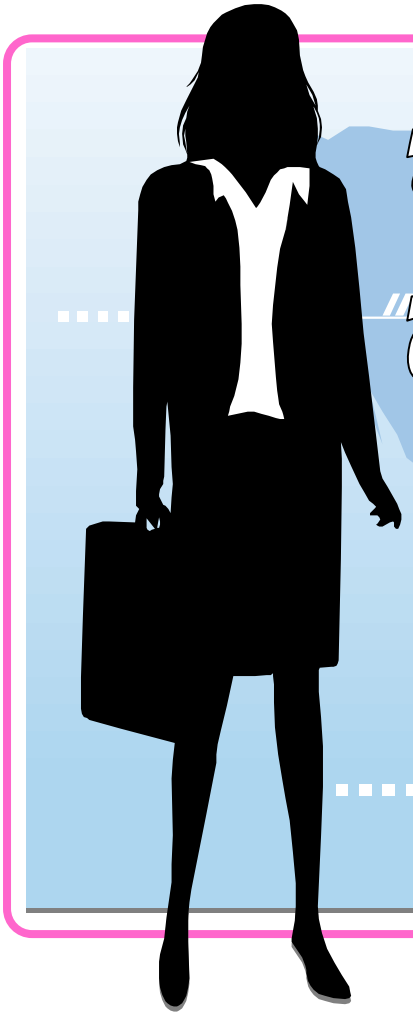


女性による まちづくりディスカッション

-Women's Visions-

日　時　7月28日(土)13：30～15：00(開場13：00)

場　所　妻沼勤労福祉会館　2階多目的ホール
(くまがや市商工会 妻沼支所)

テーマ
「おもてなしの景観まちづくり」

ー聖天さまの門前町らしい街並みと人の温かさー

パネリスト

江村日奈子さん（ファイナンシャルアドバイザー）
葛西紀巳子さん（景観審議会委員／色彩コーディネーター）
川原舞子　さん（中小企業診断士）
鴫原壽子　さん（あうんの会代表）
宮野鈴香　さん（景観審議会委員／建築士）

50音順



お問合せ先　熊谷市都市計画課（0493－39－4813）※平日のみ
会場電話番号：048－588－0140（くまがや市商工会妻沼支所）

旅先でのおもてなし体験を思い浮かべると、

女性が大きな役割を果たしている例が多いと思いませんか？

たとえば、旅館の女将さん、観光案内のバスガイドさん・・・などなど。

最近は観光ツアーにおいても、

女性の視点を重視したプランが人気を呼んでいるそうです。

これからは、まちのあり方、まちづくりの方向を考える上で、

女性の持つ感性や視点は欠かすことができないでしょう。

今回のディスカッションには、

女性のみなさんをパネリストにお迎えいたしました。

いずれも、地元や各専門分野でご活躍されている方ばかりです。

各分野の視点で、また、一人の女性としての感性・視点から、

聖天さまの門前町〝めぬま〟の景観まちづくりについて、

ゆる～く、熱～く語っていただきます。

果たしてどのようなお話が聞こえてくるのでしょうか。

どうぞ当日をお楽しみに。

第１部

「私から見た”聖天山周辺”」



鴫原　壽子（しぎはら　としこ）さん

めぬまガイドボランティア「阿うんの会」会長。同会は平成５年の結成以来、妻沼聖天山を参拝に訪れる多くの観光客に喜ばれており、ご自身もガイドとしてご活躍中。熊谷市景観計画策定時には委員としてご尽力いただくなど、景観まちづくりについてもお詳しい。

「平成の大修理」が終わり平成２３年６月に聖天堂の一般公開が始まってから、約１２万人の方が聖天様を訪れています。さらに５月１８日の国宝指定のニュース以降の約２ヶ月くらいだけでも１万５千から２万人くらいの方が訪れています。

「景観」も勿論大事ですけれど、お客様に、国宝となった聖天様をご覧になった後そのまま帰っていただくのではなくて、例えば、聖天様ゆかりの展示物を一つでも公開してくださる場所を用意して、そういうところにも足を止めていただけるようにする、ということも大事だと思います。あるいは、「街中だけだと変化に乏しい」ということでしたら、例えば足湯を用意するとか、または妻沼ラドン温泉もありますし、工夫すれば足を止めていただけるようにできると思います。

遠くは北海道、あるいは横浜、九州、奈良、京都などからお客様にいらしていただいておりますけれど、そういう方から「この後どこか見学するところがありますか？」と質問されることがあるのですが、お客様の好みとか移動手段とか色々条件がありますから「ここがいいですよ」と責任持ってお勧めすることは難しいんですね。ですから、聖天様と関連するものを展示している場所を第一のコースとして、さらに休んでいただけるような場所などを第二のコース、さらに第三のコース、とお客様に少しでも足を止めていただく、商店街を歩いていただく、そういう取組みを景観と一緒にやっていくことが大事なのかな、と思います。

それから、私たちは荻野吟子記念館のガイドもやっておりますが、このあたりの景観は、他に類の無い非常に素晴らしいものです。晴れた日には、榛名山、赤城山、日光連山、秩父連山、すべてを見ることができます。関東一円であれだけ素晴らしい眺めが出来る場所はそうそう無いのではないかと思います。記念館の近くには、利根川を船で渡ることができますし、グライダーの滑空場もございますので、ＰＲの仕方を工夫すればどんどん広まっていくのではないでしょうか。景観を良くことも大事ですが、足を止めていただける場所を用意できると、訪れてくださった方々に楽しいイメージを持って頂けるかと思います。

私たち阿うんの会は、内容的には４０分間、暑い日も寒い日も一生懸命頑張っておもてなしさせて頂いております。いらしゃったお客様からは、アンケートの中で、お帰りの際に「いい案内だった。」「本当にいいおもてなしだった。」とたくさんお答え頂いており、励みになっています。妻沼の「おもてなし」につきましては、多少ながらでもお手伝いできているのかな、と思って嬉しく感じている次第でございます。



川原　舞子（かわはら　まいこ）さん

中小企業診断士。フードコンサルティングユニット「ＧＯＨＡＮ」メンバー。中小食品メーカーの商品開発、食品小売店・飲食店の店づくりに関するアドバイスなどをされている。都内百貨店やエキナカでの地域フェアの企画・実施経験も多数。

私はさいたま市、最寄り駅が大宮駅のところに住んでいます。妻沼は日帰りで遊べるような街を目指すと良いのではないか、という意見が出ているということですが、ちょうどそのターゲットに当たるのかな？という風に思いました。

「おもてなしの景観まちづくり」がテーマということで、「おもてなし」とはどういうものだろう？ということから考えました。景観にはあまり詳しくなく、食い気の方の仕事をしているものですから文化的なことから遠くなってしまうかも知れませんが、例えば「大宮から妻沼に行きたい」と思えるような強いモチベーションは何かと考えると、「食べたいものがある」「テレビや雑誌で紹介された品物を買ってみたい、食べてみたい」というものがあるかと思います。みなさんも旅行の計画を立てる時に同じような経験をされていませんか。日帰りでも遠くに行く場合でも「どこそこのお店でアレを食べたいから、ついでにそこの近くの観光地に行こう」という風に、食べ物から行き場所を発想することが多くありませんか。

「おもてなし」というと「商品そのもの」ではなく優しい気持ちとか暖かい心とかそういう「商品の周辺の物」と捉えられがちですが、最も大事なものは「買ってみたい」「食べてみたい」「こういう経験してみたい」など「他では食べられない、買えない、経験できない」といった商品そのもののオリジナリティではないかと思います。お客さんはお金を払って体験するからこそ楽しいという面もあります。「おもてなし」の拡大解釈かも知れませんが、「暖かい気持ちで人をお迎えします」というのは「オリジナリティ」あってこそではないでしょうか。また「買うものが素敵」とか「お金払って食べたものが美味しい」とか、そういうほうが他人にも薦めやすいと思います。例えば友達に「日帰りで遊びに行ける所ないかな？」と聞かれて「妻沼」を薦める時、「あそこのお店は美味しいから絶対食べてみて！ついでにお参りも行ってきたら？」というような薦め方をした方が、友達も行ってくれるんじゃないかと思います。

食い気の話ばかりで申し訳ないのですけれど、やっぱり食べ物というのは凄く強いコンテンツだと思います。それに「おもてなしの心」とか「素敵な街並み」がセットになった時、より多くの人に「また来たい」と思って頂けるのではないでしょうか。

「おもてなし」や「街並み」も大事ですが、お客さんに来て頂くための最も大事なコ

ンテンツである「商品そのもの」、お店の方がやる部分について、妻沼の皆さんには取り組んでいただきたい。常々商品開発が大変だとは分かっていますけれど、そこから目を逸らさずにやり続けることが大事かと思います。



宮野　鈴香（みやの　すずか）さん

一級建築士。ＰＡＯ建築設計事務所。今年度、埼玉建築士会大里支部長にご就任されたほか、景観計画策定委員を経て現熊谷市景観審議会委員、ＮＰＯ住まいとまち創り集団木犀（もくせい）メンバーなど、建築・景観・まちづくりと多分野にわたりご活躍中。

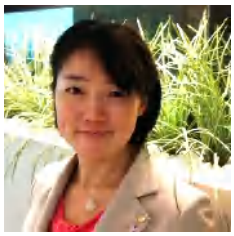
私は、建築士会に所属しておりまして、熊谷駅に向う福祉センター通り沿いで事務所をやっております。熊谷市に住んで今年で２６，７年経ち、生涯で一番長く暮らした街となりました。

今日は主催者の方から、、建築という視点から、観光客にとって魅力的な街並みということについて話をして欲しい、という要望をいただいております。

さて、このディスカッションに先立ちまして、主催者の案内で、この溶けてしまいそうな暑さの中、同じパネリストである江村さんや葛西さんと一緒に街並みを見たり、聖天様周辺のまち歩きをしてきました。その時に聖天様のところの大福茶屋さんでちょっと休憩をさせていただいたり、その向かいの西田園さん、マッチ珈琲さんに寄らせていただき皆さんとお話をさせていただいたのですが、皆さん、まちづくりにとても真摯に取り組んでいらっしゃって、また、生き生きとされていて、妻沼に来たとたん素晴らしい方達にお会いすることができました。

今回のテーマである「おもてなし」という言葉をお聞きして、「おもてなし」には何が大事だろうと考えた時、川原さんのお話にあった美味しいものというのはとても魅力的なものですし、無くてはならないものだとも思います。ですが、それだけではなく、今日お会いした方達のように、そこに住んでいらっしゃる皆さんが、毎日を楽しく生き生きと生活していることが大事なのかな、と。地域のそういう方々との触れ合いがあると、訪れたお客さんに「また来たい」と思ってもらえるのではないのかな、魅力的なものになるのではないかな、と思いました。

そして、建物や街並みというのは、まずは、そこにお住まいの皆さんやお店を営まれている皆さんが生き生きと生活できるものであること、その上で、地域に今も残っている素晴らしい伝統に配慮したものとなっていれば、その街並みは観光客を呼び寄せることができると思いますし、リピーターになっていただけるのではないかと思います。



江村　日奈子（えむら　かなこ）さん

ファイナンシャルアドバイザー、一級建築士。三井生命保険株式会社。東京芸術大学大学院在学中、聖天山周辺の古民家を地域密着で徹底調査、平成 22 年度に見事な修士論文を発表。現在「家づくりのための資金計画」などファイナンシャルアドバイザーとしてご活躍。

私は宮野さんと同じく建築士であり、今はファイナンシャルプランナーをしております。簡単に自己紹介しますと、もともとは仙台市の方で民家の高断熱や高気密、構造補強を取り入れた修復を 6 年くらいやった後、都内に引越ししてきました。この引越しを機に、それまでの仕事で培った「民家の残し方」について体系的に研究してきちんと残したい、と思ったのがきっかけで、東京芸術大学大学院に二年間在籍しまして、そこで民家の街並みをどうしたらよいか、また古民家をどのように修復し活用したら良いか、という調査の対象として妻沼を取り上げさせていただきました。調査する過程で、本当に多くの方にお世話になり、また支えて頂いたおかげで、研究論文としてまとめることができました。研究論文は妻沼図書館に納めさせて頂いておりますので、興味ある方は一度パラパラっとでも見ていただければ、と思います。

今現在ファイナンシャルプランナーをしておりますのは、古民家保存には建築的な問題も勿論ありますけれど、それだけではなく、どんなに良い建物であっても、持ち主の方が抱えている悩み、例えば経済的な面とか後継者の事とか、そういうものを総合的に解決し、まずは暮らしの地盤を固めなければ保存は難しい、ということを仕事の経験や調査の過程で実感したからです。

さて、妻沼を調査の対象として取り上げたキッカケですが、大学の演習の一環で、平成 22 年 7 月と 10 月に歓喜院聖天堂の保存修理工事を見学する機会を得まして、その時に熊谷駅から路線バスに乗って来たのですけれど、バス路線沿いの街並みに何となく惹かれたんですよね。「少し古い建物がある、普通の商店街みたいだけど･･･何となくちょっと気になる。」という感じです。

修理工事の見学が終わった後、ちょっと気になる建物もあることですし、一緒にいた友人とお茶が飲める場所を探しながら歩いてみようと聖天様の西側から通りに出てみました。出たところにはお茶の西田園さんと、その時はお休みでしたが大福茶屋さんがありまして、この西田園さんがちょっと面白い古民家再生の仕方をしていて、あまり目に付かない部分も凝った造りをしていましたので「建物自体は古く見えるけど本当に古いのかな？」と気になってお店の周りをウロウロしていました。

すると、たまたまそこにいらっしゃったツヤコさんというおばあちゃんが「あなた、

ちょっと中に入って来なさいよ」と、お店の人じゃないのに(笑)お店の中に招き入れて頂いて色々お話をさせていただいたのですが、今度は、その場にいらっしゃったお店の先代のご主人が「一生懸命この地域の勉強をしたいんだね。建物のことが好きなんだね。」と、地域の事を色々教えて下さいまして、さらに、「もっと詳しい人を紹介するよ」と“めぬまチャンネル”という市民活動団体の代表をされている藤川屋さんのご主人にすぐに電話して「今、学生さんが来ているからちょっと話してあげてくれない？」という感じで紹介下さいました。

私が妻沼にハマった理由は３つありまして、１つ目が「街の人が自分の街のことが本当に好きで街のことを真剣に考えている」ということです。

次に２つ目ですが「“よそ者”と言うと寂しいですけど、よそ者に対しても街の人が受け入れてくれる」ということでして、これは「おもてなし」の一言で言い表せると思いますが、「話しかけてくれる」、「招き入れてくれる」ということです。

最初は妻沼の調査のために片道二時間半も掛けて来ていまして、「妻沼は日帰りに適している」と言ってもさすがに日帰りは辛いと思いました（笑）。毎回調査に来るだけで精一杯で、電車に乗っている時間よりも滞在時間の方が短いのは寂しいと思い、ある時、もっと長く居られるように、と明治屋さんという旅館に宿泊しようと思ったところ、たまたまイベントか何かに重なってしまったらしく満室で宿泊できず困っていたところ、本日会場にいらっしゃっています林さんをご紹介頂きまして、それをご縁に林さんのお宅にお邪魔させて頂くようになりました。

おかげで大変助かったのですけれど、お宅にお邪魔したりとか、先ほどお話したように、私のために人を紹介してくださるとか、他所ではちょっとあり得ないのではないか、と思います。妻沼はよそ者にも心を開けてくださる方がたくさんいる、ということが２つ目の理由です。

そして、私はやはり建築物が好きなので、3 つ目として「この街並みはもっと良くなる可能性を秘めている」ということです。“人”も良いし、“建物”も良い、良い“景観材料”もある。これらが一つになったら全体的にもっと良くなる、と確信がありましたので「もっと深堀りしてみたくなった」ということが 3 番目の理由です。



葛西　紀巳子（かさい　きみこ）さん

一級色彩コーディネーター、照明士、二級建築士。有限会社色彩環境計画室代表。色彩のスペシャリストとして、住環境および、環境色彩分野のデザインワークに携わり、一方で啓蒙活動にも積極的に取り組まれている。熊谷市景観審議会委員。

色彩のスペシャリストとご紹介いただきましたが、街並みやまちづくりという視点から「街の中の色がどう在るべきか」ということが私にとって一番関心のあるテーマです。ですから、初めての街はいつも、色をテーマに「どんな街かしら？」「何があるんだろう」と、ときめきを感じながら駅を降ります。事前に情報を持たないようにしています。

妻沼には、二年ほど前から熊谷市の景観審議会の委員をさせていただいている関係で、昨年、聖天様の修復後にも見学しましたが、そこに行くまでの道のりの変化に、いつもワクワクします。

というのも、最寄りの熊谷駅から妻沼までの風景を順番に眺めていますと、市街地を抜けると、途中「地平線が見える」場所があり、とても感動します。東京近辺に、「地平線が見える」ということは「遠景」があるということで、今となっては、非常に価値があるものだと思うのです。

また、観光駐車場から聖天様までの街並みにおいては、ドキドキ感やときめき感があります。何故なら、背の高い建物が無くて家並が揃っているからです。これは大きな魅力です。「もしかすると、この街には人の心をときめかすような何かがあるんじゃないかしら？」そういう期待感を抱かせます。観光駐車場から聖天様までの距離は結構ありますけれど、それは「聖天様という主役にたどりつくまでの導入部で、心を盛り上げるための時間がある」と言い換えることができます。

「色」に関連づけてお話させていただきますと、「色」は目に見えるものですけれど、地域や歴史が積み重ねた街の色には、目に見えない色があると思うのです。それを私は、

「土地柄」に掛けて「土地カラー」と言い替えていますが、何となくそこから感じ取れる雰囲気、気配のことを指しています。「景色」は、「気の色」「気色（けしき）」という意味なのですが、その「土地カラー」を感じ取れる要素がそこかしこにある、これは妻沼の大きな魅力です。

街のときめき、というのは、最初は何となく「何かあるんじゃないか」というような気配があって、徐々にドキドキ・ワクワクと気分が盛り上がり、いよいよメインと

なるものが現れる、そういう演出があると一層、ときめきが際立つと思います。食の世界で例えるならば、最初にオードブルが出て、次にスープが出て、それからメインが出る、といった風にですね。

景観も同じでオードブルがあってメインディッシュに辿りつく。つまり、景観の「主」と「従」が大事なのです。妻沼地域は恵まれたことに、聖天様が誰もが認める「主」として存在しているわけです。ですから、その周囲は必然的に「従」となるわけです。街並みの色を考える時も「何を目立たせるか」ということが大事で、聖天様が「主」でその周囲は「従」となります。聖天様は極彩色豊かです。ですから、その周囲は色を抑えていくことが重要で、そうすることで「主」が更に際立つようになります。

私は今まで色々な地域を見てきましたが、「主」がわかりにくい地域の場合ですと、自然を「主」とし、人工的なものを「従」とするように考えます。たとえば、「紅葉の赤」が目立つようにして、建物の外壁の色は「従」として、紅葉の赤を引き立たせるように周辺は控えめな色にするのです。ある地域では、「夏みかんが名物だからその色を尊重したい」というので、「それならば周囲にある建物などの色は、夏みかんの黄色が目立つように、もっと控えめな色にしましょう」、ということになりました。このように、景観の「主」と「従」を考えていくことが必要なのです。

妻沼には聖天様が「主」としてすでに存在しているわけですから、その周りは聖天様がより一層輝くように色を考えていくことが大事かと思います。そうすることで妻沼らしい土地柄、「土地カラー」が一層、浮かび上がってくるはずです。

もう一つ、妻沼が恵まれているのは、古い写真を見ると家並み、屋根の傾斜や庇（ひさし）の出、高さ等が見事に揃っていますが、この家並みがまだ残っているということです。これは大きな魅力ですね。この家並みをさらに復活させると魅力が増すと思います。

街並み景観をデザインするには、高さや色や素材や形などを考えますが、注意しなければならないのは、「統一」と「調和」は違うということです。これらの何もかも全てを同じにしてしまうと、面白みに欠ける景観になってしまいます。ですので「統一」するのではなく、「調和させる」ということを意識します。妻沼の場合は、今、残っている古民家の色を参考にしながら似たような色などに「整えていく」ことを考えると良いと思います。

第２部

「フリーディスカッション」

【司会】
　第二部を始めます。司会はおりますが、女子会のノリでパネリスト同士でどんどん話を進めて頂いて構いません。まずは話題の出だしとして、地域の状況や課題を肌で感じていらっしゃる鴫原さんから、今までお客様から頂いた要望等について、お伺いいたします。

【鴫原】
　それでは話題の一つとして挙げさせていただきます。
　先ほど川原さんからオリジナリティのある食べ物が良い、とお話がありましたが、妻沼にも稲荷寿しという名物がございます。結構有名になりまして、多くのお客様が稲荷寿しをお求めになります。そこで最近困っていますのが、お求めになる方が本当に多くなったために、１１時半頃になると売切れてしまうことがあるのです。
　お客様から「稲荷寿しを買いたいのだけれど売切れてしまったそうなのですが、他にどこで買えますか？」と質問を受けることがありますので、その都度ご説明差し上げているのですが、そうすると「聖天様の近くで売っているお店は３軒しか無いんですか・・・」とお客様がとても残念がられるのです。かといって、お店の方も夜の２時から仕込みをされていらっしゃるということで、限界だそうなんですね。それに、食べ物の売れ行きには波がありますから、あまり売れ残ってしまいますとお店の方が困ってしまう訳です。
　お客様のご要望とお店のこと、両方を考えた時に、どのようにするのが一番良いのか、と悩んでいます。

【司会】
　この話題はぜひ川原さんにお伺いしたいところです。

【川原】
　そうですね。たくさん作れば良いのか、と言えばそんなことはないと思います。やはり食べ物の仕事で一番重要なことは、当たり前の事ではありますが美味しい事なんですよね。たくさん提供する為に、ちょっと製法を変えたり機械を入れてたくさん作れるようにしたら、その代償として味が落ちてしまった、という例もあります。
　不思議なことにお客さんには絶対に分かってしまうんですよね。分からないだろう、と思ってお店側にとっての合理化をしたけれども、長い目で見ると失ってしまうものの方が大きい、そういう事例を見たり経験しています。私は、もう「無いものは無い」という事で良いのではないかと思うのです。もし買えなかったら「次は早く来ないと買えない。」と思って頂く。妻沼のお稲荷さんが有名な事は私も知っていますので、例えば友達に紹介する時には「早く行かないと無くなっちゃうから早く行きなよ！」と

言える、そういう名物が一つ位あっても良いかと思います。お客さんとお店の双方にとっての逃げ道として、持ち帰り用で売切れてしまった時に、どこか別に、外食として食べる事ができるお店があると良いかな、と思いまし、逆にそのお店に行きたいと思って貰えるのではないかと思います。お店同士で、別のお店の商品を置くのは凄く勇気がいることですけれど・・・
（観客から「やってるところあるよ」の声）
　やってます？お店同士の競争もあるとは思いますが、お客さんにとっては、そういう協力し合って頂いた方がきっと喜ばれると、お稲荷さんに関しては思います。

【鴫原】
　そうかも知れません。隣同士で置かせて貰って、お互いが薦め合うことで妻沼全体のＰＲになるかも知れませんね。

【川原】
　やはりお店同士が仲が良いと言うのは凄く魅力的な事ですよね。大手の人達には決して出来ないことで、家族同士が知り合いだったり、小学校の同級生同士で店主さんをやられている方が妻沼には多いですから、そういうお店同士の仲の良さというのは商品作りにも活きてくると思います。第一部で「人の温かさとかあまり関係無い」みたいなことを言いましたけれど（笑）。巡り巡って、結局、そういうこともお店同士での協力や商品作りにも影響してくると思います。

【江村】
　さっき葛西さんや宮野さんと一緒にまち歩きをした時に、西田園さんの所でそういう話題が出ましたね。西田園さんの所も飲食を出しているけれども、「隣にはこういうお店がありますよ」といったことも相互に紹介し合っていました。自分のお店で食べることが出来る訳では無いけれど「他所のお店にはこういうオススメメニューがあるよ」「今日はお稲荷さんが売切れてしまったけれども、他にも美味しいお店があるよ。」と、お互い紹介しあって商売をするような仕組みや気持ちがある、それがこの地域の良いところだと思いますし、そうすることで色んなお店にお客さんが流れて、店と店とが繋がっていくことで、引いては妻沼全体が盛り上がっていく、食を通じてそういう仕掛けが広がっていくというのも良いのかな、と私は思います。

【葛西】
　私も、今日、とても感動することがありました。今の時代は競争社会ということでみんなで競い合っているけれど、むしろこれからの時代は、仲間で手を取り合って歩く、協力していくことが大事だと思うのです。だって、今の時代はインターネットで

みんな繋がっている時代だもの。フェイスブックとかでどんどんお友達が作れちゃう。ですから、最初は数人による小さな力でも、どんどん色んな人に連鎖していってやがて大きな輪になっていく、そういう取組みというのはこれからの時代の大きな核になると思うのです。それを妻沼はもう始めていることを知りまして、凄い感動したんです。

今日は「暑い熊谷」に暑さへの備えをせずに来てしまいまして、歩いている最中は本当に暑かったんですね。そしたら、お店の方が見るに見かねて「入りなさい」と言って、冷たいお茶を出して下さったの。その時「本当におもてなし精神があるなぁ」と思ったんです。今日は本当に暑いでしょう？だから涙が出るくらい感動しちゃったんです。

寄らせて頂いたお店で色んなお話を伺いました。先ほど話題に出ました「他所のお店の紹介をする」という話題もその時に伺ったんですけれど、「２年くらい前はそういう取組みや話題にすること自体、あまり無かったんだよ」ということでした。こういう取組みをするようになったのは、私は聖天様もキッカケになったんだろうと勝手に想像していますが、自分のお店に足りないものは他所のお店を紹介することでお客さんに満足してもらう。そういう取組みを通じてみんなが儲かるようになれば、お客さんもお店も、全員が丸く収まると思うんですよ。

この「協力し合っておもてなしをする」という取組みをすすめるためには、女性だからこその力っていうのもあると思うんです。ですから、ぜひ女性の皆さんからもっとお力添えして貰えたら、もっと良くなるんじゃないかな、と思います。

【宮野】

妻沼にはとても良い路地が残っているんですよね。だから街中だけでなくちょっと県道から外れる場所にも、例えばさくら公園から聖天様の方へ歩いた所にも、良い民家が残っていたりします。もし、そういう良い民家を活用して色々美味しいものが点在するようにできたら、まるで宝探しをするような感覚でまち歩きが出来るんじゃないかと思うんですよね。美味しいものを探して歩く、なんて素敵なことだろう、って思います。（観客から「妻沼には色々旨いものがあるんだよ」の声）ですよね～。だから、今日は私も色々買い込んじゃいました。

でも、鴫原さんの気持ちも分かるんです。私も、妻沼の聖天様をご覧になったお客さんから「お稲荷さんが売切れてしまった。今日はもう買えないの？」と聞かれたら、「あそこのお店に行けばまだ残っているかも知れませんよ」とお答えしたいですから。「お客さんにやっぱり食べて頂きたい」と思う鴫原さんのお気持ちはよく分かります。（観客から「道の駅にもあるよ」の声）そうですね。最近ではさらに熊谷駅近くのお店でも見かけることもあるようですが、やっぱり聖天様に来たら聖天様の近くで買えた方が嬉しいのかなと、個人的には思いますね。

【鴫原】
　そうなんですよね。「お稲荷さんを買ってくるね」と家族に言って聖天様にお越しになる方が結構いらっしゃるようでして、そういう期待感を裏切っしまうことが心苦しいんです。道の駅でも売っているのですけれど、中には「欲しい物とは違う」「妻沼の稲荷寿しとは違う」という評価をする方もいらっしゃいまして、そういう状況ですので、どのようにするのが一番いいのかが今後の悩みです。

【葛西】
　今日、稲荷寿しを味わって参りました。しかも「当たり」の稲荷寿しでした（笑）。

【宮野】
　かんぴょうの巻いてあるやつですね（笑）。

【葛西】
　そういうのってトキメキますよね。「これが当たり！？」みたいな。細やかで、これも女性の視点がスタートだったのかも知れませんね。稲荷寿しが３つ入っていたのですが、それだけでしたら「大きいわね！」で終わっちゃったかも知れません。けれど、たまたま私のお弁当は１つだけかんぴょうがグルグル巻きになっていましてね、「これ何かしら？」と疑問を口にしたら、「それ、当たりです」って（笑）。凄く嬉しい気持ちになりました（笑）。こういうこともおもてなしの精神ですよね。皆さんもう自然にやっているんですよね。そういうのを知ることができて、なんかもう、今日は朝からずっと楽しいんですよ！こんなに暑いのに（笑）。

【鴫原】
　ところで葛西さん、それはどのように当たってました？

【葛西】
　え！？（笑）

【鴫原】
　いや、「当たり」には訳があるんですよ。

【葛西】
　「××××だから」と、その時ちょっとだけ解説はして頂いたのですが、もう一度ちゃんと教えて頂いても宜しいですか。
　（注：「当たり」の訳をご存じない方のため、敢えて伏せ字とさせて頂きます。）

【鴫原】
　そうなんです。××××が××××したものなんです。その××××をかんぴょうで巻いているのですけれど、あれが喜ばれるんですよね

【パネリスト一同】
　「そうなんですよ」「嬉しいですよね」

【鴫原】
　あれが知恵なんですよね。

【葛西】
　同感です。その時「素晴らしい知恵だな」って思ったんです。食べ物を無駄にしないですし。それでいてお客さんを喜ばせてるわけでしょう？つくづく楽しみの材料がたくさんある地域だな〜、って感じました。

【江村】
　それがまた「公表されていない」という事も凄いと思うんです。その「当たり」という情報はどこかに書いてある訳では無く、会話といった人と人の繋がりを通して知ることが出来るという点も良いと思うし、また、そうやって知ると感動が増しますね。

【司会】
　食べ物の話になると盛り上がりますね（笑）。

【川原】
　私も昔「当たり」だった事がありまして。その時も、その事を会話の中で教えて貰ったのですが、やっぱり凄く感動したんですね。何と言うか、こういう、「人からこっそり教えて貰う」情報って得した気分になりますね。逆に、ガイドブックとかに書かれてしまうと「詰まらない」みたいな。ただ、こういう情報の出し方もケースバイケースでして、グっと「くるもの」と「こないもの」があるので、なかなか判断が難しいんですけども。

【鴫原】
　ただ「かんぴょうが巻いてある」のと、それを「当たりですよ」と言われるのと、違いますよね。

【川原】
　違いますね～。

【鴫原】
　私たち妻沼の人たちも、これからは声がけが必要ですね。「これ、当たりですよ」って（笑）。

【川原】
　先ほども「インターネット」という話題がありましたけれど、こういうのって、フェイスブックとかで、話題のネタにできるし、興味を持って貰いやすいですよね。

【江村】
　さっそくネタにしちゃいました（笑）。

【川原】
　これが「当たり！」って言うことを書きたくなるんですよね。言い方は悪いですけれど、こういうネタになる話題をみんな探して歩いている、というところもありますから、情報発信すればみんなも興味を持って貰えるでしょうし、どんどん広まっていきますよね。

【葛西】
　会場の方でフェイスブックをご存じない方もいらっしゃるかも知れませんのでちょっとお話致しますと、写真とかをインターネット使って誰でも情報発信が出来るんです。その情報を載せた所には「いいね」っていうボタンがあって、その写真とかを見た人が「良いな」とか「面白いな」と思ったら、そのボタンを押して意思表示をすることが出来るんです。
　この「いいね」というボタンが面白いんですよ。この「いいね」ボタンを押した人数が分かりますので、どれだけ多くの人に押して貰えるか、そして多くの人が押したということはそれだけの人達が共感してくれた、ということなんです。ですから、情報発信できる「この街の“いいね”」を見つけることがまずは大事なんですよね。そして、その「いいね」を発信していく。「いいね」に共感したら、賛同したくなるのが人情じゃないですか。賛同してくれた人はお客さんになって貰える可能性があります。賛同が増えれば増える程、お客さんが増える可能性があるという事なんです。
　この「いいね」をいかに増やすかが大事なんです。本当は「いいね」なのに、住んでいる方々は当たり前になっちゃっていて「いいね」だと気付かない、という事が結構あります。その当たり前になっちゃって気付きにくい中、どうやってどうやって「い

いね」を捜すかが難しい所なんですけれど・・・捜すしか無いんですよ、やっぱり。
　会場の中に展示してある写真を今もこうして見せて貰っていますけど、妻沼の「いいね」がたくさんあります。また、街を歩いているとお店の前に、写真とか色々飾ってありましたよね。外から来た人達はこういうのを見たときに「こういうものがあるんだ、いいわね」って思うんです。こういうのって皆さんにとっては当たり前のものになってしまっているかも知れませんけれど、例えば、カメラマンや画家の方というのは一瞬をキャッチして表現するのですが、その一瞬に感じた「いいね」を作品に込めているから、その作品を見ている私たちにも思いが伝わってきて同じように「いいね」と感じるんです。そういう、皆さん自身が「いいね」と思う地域の材料を再認識して、そしてどんどん増やしていく、という事をされてもいいかも知れませんね。これも、おもてなしの要素に繋がるんじゃないかと思います。

【司会】
　このまま食べ物の話で終わったらどうしようかと少々心配していたのですが（笑）、ちょうど良い話題の転換をして頂きました。続いて、皆さんの協力を頂きながらこの地域の「いいね」を捜してみたいと思います。聖天様の門前町でもありますので、まずは街並みの「いいね」について、宮野さんからお伺いしても宜しいでしょうか？

【宮野】
　今日も街並みを拝見させて頂きました。江村さんが調査した時点からまだ２年しか経っていませんけれど、だいぶ街並みが壊されたような印象を受けました。とても良い古民家が無くなってしまった跡地を見ると、やっぱり寂しく感じて心痛むものでした。先ほど葛西先生がおっしゃったように、地元熊谷の建築士として、やっぱり「待った無し」の状況ではないかと思います。色彩に関しても街並みのルールに関しても、「いいね」であったり街の良さというものを早く皆さんで共有して頂き、地域の目標を定めてそこに向って行く、そういう流れを早く作らないといけないのではないか、と今日つくづく感じました。
　この地域の目標というのは、やっぱり聖天様の伝統に基づいたものとして皆様が共有できるものが良いと思います。また、ただ新しいものをポンと持ってくるだけでは無く、古いものを如何に作り直していくか、さらにその中で新しい要素を加えていく、ということも時には必要だと思います。時代はどんどん変わって行きますから、古いものが全て、という訳では無いんですね。でも、まるで新しいもの、というのは心通うものが無いんじゃないか、とも思います。建築物というのは人が住むもの、使うものですから、尚更そう思います。
　今まで在ったものを大事にしつつ、その上で、皆さんで共有の意識を持ってこれからの街並みを作っていく、そういう取組みがこれから必要になると思います。ただ、

街並みの現状を考えると、あまり時間的な猶予が無いような気がします。ですので、この取組みのお手伝いをするために、地元の建築士として皆さんと一緒に活動していけたらいいな、と思っています。

【司会】
　建物の保存というとやはり資金面が問題になると思います。そこで、フィナンシャルプランナーである江村さんからぜひお話をお伺いしたいと思うのですが・・・

【江村】
　もうですか！？（笑）いきなり経済的な話題に行く前に、もっと良いところ探しをした方がいいんじゃないかと思うんですけども（苦笑）

【司会】
　そうですね、ぜひ良いところ探しをお願いします。

【江村】
　まち歩きをしていても、地域の皆さんから「歩いても周りには何も無いよ」と仰られます。ですが、今、宮野さんから路地の話がありましたが、私には「いいね」が色々あるように思いますので、そういうところを共有するところから始めたいと思います。
　（江村氏の研究論文掲載「街並み連続写真」を見ながら）写真を並べてみると街の風景って客観的に見えてくるのですが、赤で囲ったものや黄色で囲ったものが古い民家と言われるものです。割合にして街並みの大体２５％くらいが古い建物ということになります。でもまあ、建物だけの話題だと専門的になってしまい興味が無い人もいらっしゃるかと思います。そこで、それ以外のものを紹介します。
　例えば（スライドの写真を見ながら）この路地にある生垣、どこか分かりますでしょうか。下町（しもちょう）近辺の東側にある路地をちょっと入ると、こういう風に生垣がずーっと並んでいる所があるんですね。
（観客から「〇〇さんの所かな」の声）
　そうです、〇〇さんの所ですね（会場爆笑）。

【司会】
　ローカルですね（笑）。

【江村】
　次（三叉路に庚申塔がある写真）を見て下さい。これは先程の写真の場所からちょっと離れた所で、お寺さんに向う所です。「熊谷市景観講演会の概要」という資料に「人

間は目の前を見る、下のほうを見る」と書いてあったと思います。この写真の場所でちょっと下の方を見ると、庚申塔があるんですね。庚申塔って街のあちらこちらにあります。庚申塔について調べてみるとどうも色々種類があるらしくて興味が湧くのですけれど、こういう街の中にある道の分岐点に庚申塔があって、それがまたアスファルトで舗装されていないような道が何気なく残っていたりして、こういう風景って意外と残っていないな、こんないい所に出会っちゃった。これも私にとっての「いいね」です。

（稲が実った田んぼが広がって、その先に利根川の土手が写っている写真）少し利根川の方に行った所の写真です。普通の田んぼに見えるんですけど、田んぼの先に視界が、青空が広がるっていうのは中々無いですよ。そういうのも「いいね」だと私は思います。街の中心だけで無くてその周りにも、自慢できるような自然があるっていうのはいいですよね。

さて、研究論文を作成する時、学生の立場でどういう視点で街を見たかと言いますと、まず、今までどういう取組みが行われて今の街並みになったのか、という歴史です。次に、街並みの中に、どういうものが宝物が実際残っているのかな、ということです。そして、妻沼だけでなく他の地域も含めて、街並みや古民家の補修等の実例を調べました。

そういった視点で調査をしていったところ、街並みや古民家の補修というのは、今後どういう利用をするのか、どういう活用方法があるのか、ということを考える事が重要ではないかと思うようになりました。経済的な問題というのは、実は、その先の話なんですよね。

地域や街並みの中に、今、どういう「いいね」があって、それを今後どういう風にしていくのが良いかを皆で共有する。その上で次に、じゃあそれに必要なお金をどうやって用意するのか、皆で出し合うのか、助成金が必要なのか、と言う事を考えていく。最初に助成金ありきで考えてしまうと、その助成金制度の枠の中で「何をやるか」って考えてしまって、発想や行動に勢いがつきにくくなってしまうんですよね。

まずは皆さんがそれぞれ「どういう思いを持っているのか」「どういう街にして行きたいのか」という事を話し合える場をもっともっと作って貰いたい、と言う事が今回２年間研究でこちらの地域に入らせて頂いた中で一番思った事でした。

ところで「妻沼聖天山周辺地域ってどこまでですか？」って聞かれたら、皆さんそれぞれ認識が違うんじゃないでしょうか？

私は、妻沼聖天山南側を通る県道羽生妻沼線と県道太田熊谷線とで形作っている鍵型の部分を「門前町」と位置付けましたけれど、例えば、「妻沼聖天山周辺地域」と言う時にはそれよりもっと広く、周辺にある田園風景とかも含めてもいいんじゃないか、と思いました。そして、その「妻沼聖天山周辺地域」の中をコアとサテライトとに分けて考えて、門前町という中心部だけでなく、その周辺部にある「いいね」も見つけ

ていって、全体でプロデュースしていったらいいんじゃないかな、と私は思ったのですけれど、そういう事をもっと皆さん話し合って貰いたいなあ、と思っています。
（江戸末期と現在の地図を比較した写真）さて、「昔の事はもういいよ」っていう方も中にはいらっしゃるかも知れませんが、私は古いものが凄く好きで歴史に嵌っちゃうと中々戻って来れなくなってしまうんですけど、古地図と今の地図を比べると昔の区割りがまだ残っていることが分かります。こういう「道の記憶」が残っているということも妻沼の良さだと思います。建物は残念ながらだんだん少なくなっていますけれど、こういう風情を感じられる要素と言うのは実はまだまだ残っていますので「もうあんまり残ってないよ」と考えるのでは無くて、「まだこんなに残っているよ！」と前向きに捉えて行動することから始めるといいんじゃないかと思います。

【鴫原】
そうですね、今おっしゃったように、妻沼は歴史の古い街ですから。「ぬの橋」という鎌倉時代からの謂われがあるものが、まだ残っていたりします。やはり私たちも、新しいことに挑戦するだけでなく、古い物をどうやって残していくか、今の人達だけでなく将来の人達にも残していけるか、そういう事もテーマですよね。

【司会】
話題は尽きませんが残念ながら時間となってしまいました。
パネリストの皆さん、素晴らしい話を聞かせていただきまして、ありがとうございました。

付録

アンケート集計結果

アンケート集計結果（回収数２２/２７）

Q1　あなたは聖天様本殿を参拝し彫刻等をごらんになりましたか。

１. 見ました	21	
２. まだ見ていない	1	

Q2　やわらかい雰囲気の会場をめざしました。いかがでしたか

１. よかった	15	
２. わからない	4	（チャレンジとして◎）
３. よくない	2	（パネリストのテーブルを円形に配置したなら、参加者もその周りにすると良い）
無回答	1	

Q3　円形で会場配置しました。聞きやすさなどはいかがでしたか

１. よかった	12	
２. ふつう	3	
３. 聞きづらかった	2	
４. わからない	1	
無回答	4	（スクリーンが頭で観づらい）

Q4　このディスカッションは景観や活性化について参考になると思いますか

１. なった	17	
２. ならない	0	
３. わからない	2	
無回答	3	

Q5　あなたは女性だけのパネリストで行うことについていかがですか

１. 大いに行うべき	15	
２. 男性が加わったほうがよい	5	（ともに話し合ったほうがよい方法が出ると思います（70歳～：女性））
３. わからない	0	
無回答	2	

Q6 あなたにパネリストとして参加してくださいと依頼したらお受けできますか

1．お受けしたい	5	
	女性 4（40歳代（その他）・60歳代（専業主婦）・70歳～（専業主婦）、（主婦＋パート）	
	男性 1（50歳代（その他）	
2．わからない	5	
3．受けない	8	（理由：男だから（～30歳代：男性））
無回答	4	

Q7 現在どちらにお住まいですか？

1．熊谷市内	22	（旧妻沼町16・その他5・無回答1）
2．熊谷市外で埼玉県内	0	
3．県外	0	

Q8 あなたはどちらのご出身ですか？

1．熊谷市内	19	（旧妻沼町12・熊谷6・無回答1）
2．熊谷市外で埼玉県内	1	
3．県外	1	
無回答	1	

Q9 あなたの性別について

1．男性	5
2．女性	17

Q10 あなたのお歳を教えてください

1．～30歳代	3
2．40歳代	2
3．50歳代	3
4．60歳代	4
5．70歳～	10

Q11 あなたのご職業はつぎのうち

1．専業主婦	12	
2．主婦＋パート	1	
3．会社員・商店	1	
4．会社役員・商店主	3	（うち1名：もと商店主とのこと）
5．その他	5	

ご意見・ご感想

〇「景観」の立ち位置がよくわからない。（文化？産業？地域づくりの部品？）
景観・街並みって、「昔」しかお手本がないの？（50歳代男性：会社員・商店）

〇縁結びというストーリーをしっかり作る（成功物語、いい思いができる）
非日常の空間作り（ハードとソフト）演出すること。
⇒ まちづくりにおいて、女性という切り口はいいと思います。
落ち着いた30代の女性　励ましのまち、相談できる、元気になれる。
おもてなしの「景観」まちづくり　⇒景観とは、どういう意味・意義？
⇒ もうちょっとここにフォーカスした話が聞きたい。コーディネーター役をしっかりつける。（40代女性：その

〇縁結び通りに住んでいる者です。魅力的な景観のためにどうしたらよいか、あらためて考え直しました。
よい方法はむずかしいですね。（70歳～女性：専業主婦）

〇お寿司のお話も出ましたが、縁結びメニューもありますのでパネラーだけのお話しでは一方通行で
もったいないですね。せっかくのお話が中途半端で残念ですね。（60代女性：専業主婦）

〇街中景観を考えた時、聖天様がメインである縁むすびの街としていく場合、川越のまねをするわけでは無い
市で助成金を出してもらって聖天様の屋根を真似た屋根を街中に各商店の屋根つくりにしたらどうかなと
思いました。時間が話の途中で終わるのは、まとめが無くて良くない（６０代女性：専業主婦）

〇ディスカッションまでの時間が長すぎるように思いました（50代女性：その他）

〇開式にあたり、本部の人達の話が長すぎ。
パネルディスカッションの人達の時間がなさすぎる（70歳～女性：専業主婦）

〇今後もこのような活動を続けて欲しいです。色々気づかせていただきました（40代女性：会社役員・商店主）

〇パネラーの皆さんの活発な意見は、地元だけでない外からの視点で捉えている事がすばらしい
（50代男性：その他）



おつかれさまでした♪